

技術と真理

— ハイデガーのテクノロジー批判 —

山本 與志隆

序

1930年代後半以降のハイデガーは、存在の歴史 (Seinsgeschichte) の視座のもとに、西洋の形而上学の歩んできた道程を批判的に捉え直すことを試みる。その一つの試みとして、形而上学の歴史の現代における帰結としてのテクノロジーの本質を問う『技術への問い (Die Frage nach der Technik)』¹⁾ を公にしている。この著作は1947年にブレーメンでなされた講演がもとになっており、その講演もまたハイデガー全集第79巻として公刊されている。そこで取り上げられ、批判されているのは、現代のニヒリズムの時代におけるテクノロジーのあり方、さらに言えばそうしたテクノロジーに依存する人間存在のあり方であった²⁾。本稿では、公刊された『技術への問い』においてテクノロジーの中で人間存在がどのようなものとして捉えられているかを確認すると共に、そのようなテクノロジーのあり方と真理との連関を明らかにしたい。

また一方で、ハイデガーは、『技術への問い』に先立って、技術と根を同じくする芸術への問いとして『芸術作品の根源 (Der Ursprung des Kunstwerkes)』³⁾ を問うている。ここで問われている芸術のあり方は、やはり芸術作品と真理との連関において、先のテクノロジーがもたらす「危険」から人間存在を救うものとして考えられている事柄と密接に関わり、芸術は人間存在に対してむしろ積極的な可能性を与えるものとして思惟されている。

我々はこれらの著作を解釈することを通して、ハイデガーが取り上げようとしてい

1) M. Heidegger, *Die Frage nach der Technik* (1953), in *Vorträge und Aufsätze* (Gesamtausgabe Band 7), Klostermann, 2000. なお、本文中におけるハイデガー全集からの引用については、Bd. の略号の後に巻数と、ページ数を添えて示す。

2) 拙論「テクノロジー時代のニヒリズム—ニーチェとハイデガーの思惟を手がかりにして—」(愛媛大学法文学部論集人文編第44号(2018年)所収)を参照。

3) M. Heidegger, *Der Ursprung des Kunstwerkes* (1935/1936), in *Holzwege* (Gesamtausgabe Band 5), Klostermann, 1977.

たテクノロジーの問題を明らかにし、さらにそうした技術の孕む「危険」の超克への示唆を見出すべく、技術と芸術、そして真理を巡るハイデガーの思惟を跡づけることを試みたい。

本稿は以下の3つの部分に分かたれる。

- § 1. 技術の本質
- § 2. ニヒリズムの内にある人間存在
- § 3. テクノロジーの支配の転回

§ 1 技術の本質

1. 1 技術の本質への問い

ハイデガーは『技術への問い』の中で、我々は技術について問うが、それは技術の「本質 (Wesen)」について問うのであって、個々の技術的なものを問うのではない、と言う。ここで問われているのは技術の「本質」すなわち技術を技術であらしめているもの、古代以来の形而上学の伝統に従えば技術の「イデア」であるということなる。しかし、このように言われるイデアとしての技術の本質への問いは、ハイデガーの思惟に馴染みの者にとってはきわめて違和感をもって聞かれるであろう。というのは、ハイデガーこそまさに、プラトニズムとも名指される西洋の形而上学を批判したニーチェの思惟を引き受けつつ、西洋の形而上学の伝統を根本的に批判してきた者だからである。したがって、ここで技術の「本質」と言われる際にも、決して伝統的な意味での本質 (Wesen) が思惟されていると捉えられてはならないという点が注意を要する。ハイデガーは次のように言う。

[技術についての道具的観念は確かに正しいが] 正しいものは眼前にあるものに即してその都度なにか的確なものを確認する。だが、この確認は、それが正しいものであるために、眼前のものをその本質において露わにすることを必ずしも必要としない。しかし、そのような露わにすることが生起する (geschehen) ところでのみ、真なるもの (das Wahre) がそれ自体の固有性を性起せしめる (sich ereignen)。 (Bd.7, S. 9) ([] 内は山本による挿入。以下同じ。)

このようにハイデガーは技術を手段として扱う道具的観念の正しさを確認しつつ、しかし、その正しさは、未だ技術の本質の真なるものを露わにはしない、と言う。このことから理解されなければならないのは、ハイデガーが「技術の本質」を問うと言うとき、問われているのは、学問的・科学的な意味での「正しさ (Richtigkeit)」の

圏内においてではなく、真理 (Wahrheit)、それもハイデガーが古代ギリシアの始まりにおいて捉えようとしたアレーティア (ἀλήθεια) という意味での真理の圏域においてである、ということである⁴⁾。ハイデガーは「正しいもの」であるためには、眼前のものの「本質」において露わにすることを要しない、と言う。それに対して、このような露わにすることが生起するところでのみ、真なるものは性起する (sich ereignen) と言う。そこから導かれるのが、我々は「技術の本質」に達するためには (あるいは少なくともその近みにいるためには)、我々は「正しいもの」を通りぬけて、「真なるもの」を求めねばならない、という帰結に他ならない。これはやや錯綜した事態と言わざるをえないが、所謂後期のハイデガーによる思惟においては、伝統的な哲学において「真理」と呼ばれ、哲学の目標とされてきた事柄に対して、ハイデガーはそれを「存在者の真理 (die Wahrheit des Seiendes)」とし、それら存在者の真理を「真理」として存在せしめる「存在の真理 (die Wahrheit des Seins)」を問うべき事柄としていたということを考慮する必要がある。すなわち、ここで「正しいもの」の「正しさ」とされているのはハイデガーからすれば存在者の真理の圏域に留まるものであって、根本において問われるべきものである存在の真理としての「真なるもの」には達していない、ということである。したがって、先の文脈において、ハイデガーが「技術の本質」を問いつつ、技術のアイデアとも言うべき事柄として、「手段」あるいは「人間の行為」ということが言われているのも、それらがさし当り眼前に存する事柄としての技術、あるいは、技術によって製作され、利用され、それら全体として整えられたものとしての「道具 (instrumentum)⁵⁾」に妥当することとして述べられた、「存在者の真理」であるということになる。それに対して、ハイデガーがここで

4) ハイデガーは少し後で、「〈こちらへと - 前へと - もたらすこと〉 (Her-vor-bringen) とは、覆蔵性 (Verborgenheit) からこちらへと、不覆蔵性のうちへと、前へともたらすのである」と規定し、「こちらへと - 前へと - もたらすこと」がそれ自体の固有性を出来させるのは、「ただ覆蔵されたものが不覆蔵なものに至る場合だけである」そして「このように不覆蔵なものに至ることは、我々が露現 (Entbergen) と名づけるものにもとづいており、またそれのうちで揺れ動いている」と述べた後、'ἀλήθεια' と真理 (Wahrheit) の連関について、次のように言う。

ギリシア人は、この露現のためにアレーティア (ἀλήθεια) という語をもっている。ローマ人はこれを veritas (真理) という語によって翻訳する。我々は Wahrheit (真理) と言い、そしてそれを普通、表象作用の「正しさ (Richtigkeit)」として理解している。(Bd. 7, S. 13)

また、『真理の本質について (Vom Wesen der Wahrheit)』(ハイデガー全集第9巻『道標 (Wegmarken)』所収) も参照。

5) 道具としての 'instrumentum' の語源である動詞 'instruo' には「秩序づける、整える」の語義がある。田中秀央編『研究社羅和辞典』(1966年、研究社) 参照。

問い進めようとしているのは、そうした存在者の真理をそのものとして存在せしめている、技術という存在の真理なのであり、それが「技術の本質」と名指されていることに他ならないと考えられる。

そこからハイデガーは、「手段」として捉えられた技術のあり方を「原因」として規定し、伝統的哲学の「四原因説」に遡行する。そして、原因性 (Ursächlichkeit) すなわち因果性 (Kausalität) へと遡行するというのは、ハイデガーによれば、「道具的なものは因果的なものに基づいているからである」(Bd. 7, S. 11) ということによる。

ここでハイデガーは、ギリシア的に受け取られた原因としてのアイティオン (αἴτιον; 原因) の意味を「責めを負うこと (Verschulden)」(Bd. 7, S. 10) として規定し、のちに因果性として理解される原因性との差異を明らかにしようとする。ギリシア人にとって責めを負うこととして理解された原因とはあらゆるものを現前 (Anwesen) へともたらず、あるいは、あるものを現出へともたらず (ins Erscheinen bringen) というものの四つの仕方であると言われる。そして、このようにあるものを現出へと至るように誘い出すことを、誘発 (Veranlassung) と呼び、これをギリシア的に捉えた因果性と名づける (Bd. 7, S. 12)。さらにここから、このような誘発によってあるものを「生み出す (Hervorbringen)」ことをその字義に従って〈こちらへと - 前へと - もたらずこと〉(Her-vor-bringen) として解釈しようとする。すると、この〈こちらへと - 前へと - もたらずこと〉は、手仕事の製作、芸術的 - 詩作的創造から、ピュシス (φύσις; 自然) の働きにまで及ぶものとして解釈されることとなる。

ハイデガーの議論に従うならば、伝統的な四原因説もまたこの誘発の四つの仕方に他ならず、したがって〈こちらへと - 前へと - もたらずこと〉の内働いていることになる。つまり、自然が生み出すことも手仕事や諸芸術が製作することも、生み出すこと、製作することという過程において、生み出されたもの、製作、創造されたものをその都度の輝き現われ (Scheinen) の内へと (前へ) もたらずことに他ならないのである。そしてこの「輝き現われ」ということが、ギリシア的に理解された現前ということと結び合わされて、このように理解され、解釈されることから、真理 (Wahrheit, ἀλήθεια) という事柄との関連が明らかにされる。すなわち〈こちらへと - 前へと - もたらずこと〉とは覆蔵性 (Verborgenheit) からこちらへと、つまり不覆蔵性の内へと、前へともたらずことなのである。ハイデガーは〈こちらへと - 前へと - もたらずこと〉の固有性を覆蔵されたものが不覆蔵性 (Unverborgenheit) の内へと至ることに見出している。そして、このように不覆蔵性に至ることが露現 (Entbergung) ということに他ならない。このように理解された露現と (不) 覆蔵性の連関の内ではこそ、ハイデガーの真理は理解されなければならない。したがってこの境位にあつては、「真理」として通常理解される「表象」の「正しさ」ということとは位相を異にする境域

が思惟されているのであり、この境域においてこそ初めて「正しさ」としての「真理」が「真理」として立ち現れてくると思惟されている。

あらためて確認するならば、道具的なものの中で思惟されていた手段としての技術のあり方は技術の本質を言い当ててはいない。ハイデガーによれば、技術とは「露現のひとつのあり方」であり、技術の本質はこの露現の領域、すなわち真-理 (Wahrheit) の領域において思惟されねばならないのである。

1. 2 総かり立て体制と徴用物資

前節で確認されたことは、技術とは露現のひとつのあり方として、真-理の領域に属するということであった。しかし、そうであるとすれば、技術と哲学とはともに「真理」を明らかにすることとして互いに共通性を有するということになるのではないか。実際ハイデガーは、テクネー (τέχνη) というギリシア語に遡って、その意味を解明しようとして、「手仕事のな行為や技量」のための名称であるにとどまらず「高尚な技」すなわち芸術のための名称であることから〈こちらへと-前へ-もたらすこと〉という意味でのポイエーシスに属することを指摘する。それとともに、このテクネーという語がエピステーメー (ἐπιστήμη) との密接な関連を有することに言及し、両者が最も広い意味での熟知 (Erkennen) のための名称であったことを指摘する。それらは何かに精通すること、熟達することを意味し、「解明 (Aufschluß)」を与えること、解明することとして、やはり一種の露現であると言われる (Bd. 7, S. 14)。したがって、テクネーは所謂「技術」であると同時に「真知」としてのエピステーメーを露現することとして、哲学に通じるものと言っても過言ではないように思われる。ハイデガーの言うところでは「技術がその本質を発揮するところとは露現と不覆蔵性とが、すなわちアレーティア (ἀλήθεια) が生起する領域なのである」とされる (Bd. 7, S. 14f.)。

ただ、ここで注意しなければならないのは、このような真正な意味における「技術」のあり方は古代ギリシアにおいてテクネーとして理解されたもののあり方であって、現代技術にもそのまま妥当するものではない、ということである。

むしろ、現代技術がその問題性を露わにするのは、このような本質が変容を蒙っているからに他ならない。そこで我々は現代技術のあり方を見極めることによって、テクネーの本来の〈こちらへと-前へと-もたらすこと〉というポイエーシスのあり方がどのように変容したかを確認する必要がある。

ハイデガーによれば、現代技術の内に存する露現は一種の挑発 (Herausfordern) であり、例えばエネルギーをエネルギーそのものとして取り出し、貯蔵されうるように引き渡せという「理不尽な要求 (Ansinnen)」を自然に突きつけるという (Bd. 7, S.

15)。これはそれ以前の、我々人間存在が自然に委ねられたあり方とは根本的に異なるものと考えられている。現代技術は自然を挑発し、エネルギーを開発するようなあり方を根本動向としている、ということになる。

このような根本動向は、大地から鉱物資源を採掘することにも、農業において畑地を耕作することにも同様に妥当するとされる。かつては自然の内において、自然に委ねる仕方でもなされていた耕作も、自然を調達し、徴用する (bestellen) あり方において、今や「機械化された食品工業」(Bd. 7, S. 15) となっている。そして、この動向は現代のテクノロジーの極としての原子力にまで到達せしめられる。鉱物資源としての化石燃料や原子力、さらにはライン河に建てられた水力発電所 (Kraftwerk) に対して求められ、挑発され、徴用されているのは動力エネルギーとして機械を動かす、もしくはタービンを回すことにより発電し、これをさらなる動力として、機械を駆動させて製品を製造し、産業を興し、経済を活性化させて、経済活動を循環させていくことに他ならない。ハイデガーは、現代のテクノロジーによってすべてのものが円環の中に巻き込まれ、途切れることのない無限の回転運動を強いられているあり方を描き出す (Bd. 7, S. 16)。その際そこで調達され、徴用されるものは、次のように徴用物資 (Bestand) と名づけられることになる。

[挑発する調達によって存立するものに固有な種類の不覆蔵性の下で] 至るところで求められているのは、即座に使えるように (auf der Stelle)、しかもそれ自体更なる用立て (Bestellen) のために用立てられるようにあることである。そのように用立てられたものにはそれに固有な状態 (Stand) がある。我々はそれを徴用して立てられた物資 (Bestand) と名づけよう。……徴用して立てられた物資という意味で存するものは、もはや我々に対象 (Gegenstand) として向き合っているのではない。(Bd. 7, S. 17)

この徴用物資は、次から次へと、先へ先へと駆り立てられる円環運動の中で、そのもの自体として存立することなく、次の、その先の用へと差し向けられるにすぎないものに成り下がる。このような仕方では、現代技術の産物は露現されえないことから、そこで露わにされるものは、かつての自然に委ねられたものではなく、「挑発」という意味で「調達」されたもの、ということになる。そうした用立ての連鎖の中で、即座に使えるように待機して、さらなる用立てへと用立てられるように (auf der Stelle) のみ存立している状態が徴用物資のあり方である。このようなあり方における物体はもはや近代の主観 - 客観 - 関係の中で捉えられる対象としてのあり方をも喪失すると言われる。というのも、対象としての客観 (Objekt) は、それに向き合う

ものとしての主観 (Subjekt) となる人間存在を前提することになるが、現代技術の徴用物資の内にあるものとしての人間存在は、そうした近代的な主観としての地位そのものを喪失してしまうからである。先に見られたように、人間が自然エネルギーを開発するように挑発されるのは、人間自身もまたこのような用立てる露現の円環の内に入り込み、その中の構成要素の一つになっているからに他ならない。ハイデガーはこのことを「人的資源 (Menschenmaterial)」や「患者 (Krankenmaterial)」といった語から指摘する (Bd. 7, S. 18)⁶⁾。つまり、我々は往々にして、現代社会の中で要求された一定の役割を担うことが可能であれば、それと同等の他の存在者と代替可能な、同型画一性の下に捉えられうるものとしてのみ存在を認められるということである。その意味で、我々人間存在こそが一層根源的に徴用物資に属すると言われるのである⁷⁾。

しかし、このような徴用物資のあり方を主導し、遂行してきたのは人間ではなかったのか、という問いが生じてくる。この問いに対してハイデガーは、こうした徴用物資としての存在者の現れ方を支配する不覆蔵性すなわち真理という領域を人間は意のままにすることはできないと言う。それはプラトンによってもイデアのあり方を自ら作り出すことができなかつたように、思惟する者はその都度の存在の真理の語りかけに応答することができるのみであるからである⁸⁾。そのような不覆蔵性の領域が、現代技術においては、用立てる露現として現象している。このように露現し、すべてを徴用して立てられた物資として用立てるように人間を集約するものをハイデガーは総-かり立て体制 (Ge-stell) と名づけるのである。

現代技術は用立てる露現としては、単に人間の行為にすぎぬものではない。だから、我々は今、それ自体を露現するものを徴用して立てられた物資として用立てるように人間を集約するあの挑発しつつ呼びかけ、要求するものを総-かり立て体制 (Ge-stell) と名づける。(Bd. 7, S. 20)

6) さらに「選手 (俳優) 要員 (Spielermaterial)」という語の内にも同様の把握の仕方が確認される。

7) 前掲拙論「テクノロジー時代のニヒリズム—ニーチェとハイデガーの思惟を手がかりにして—」を参照。

8) ハイデガーは次のように言う。「たしかに人間はあれこれのものをしかじかに表象し、形作り、操作することができる。しかし、その都度現実的なものが姿を現したり、あるいは退去したりする不覆蔵性という領域を、人間は意のままにすることはできない。現実的なものがプラトン以来イデアの光の内に姿を現すという事態は、プラトンが作り出したのではない。思惟する者はただ自らに語りかけられたことに応答するだけである。」(Bd. 7, S. 18)

この総-かり立て体制の下で、人間存在はどのようなものとして理解されるかといえば、上述のように、真理を意のままになしえぬというあり方で、あくまでも総-かり立て体制によって、人間が現実的なものを徴用すべく挑発されるのであって、近代以降認められてきた客観的世界に対する主体はすでに失われており、全体としての総-かり立て体制の下で渦をなすような運動の一端を担う構成要素（Bestandstück；部分品）として露現せしめられるようになる。つまり、総-かり立て体制の下では、人間は人間存在としてのあり方を喪失せしめられて、他の物体と同様に全体を構造的に作りなす部分品としてのみ存在するようになる。それらは人間存在以外の他の技術的なものとともに技術的な労働（Arbeit）の領域に属すると言われるが、これは総-かり立て体制に応答する形で生起するものであって、決して総-かり立て体制を生じさせるものではないと言われる。ここでも、かつては人間存在の主体的行為の重要な一部をなしていた労働もまた総-かり立て体制にまき込まれ、その下ではじめて存在するものとみなされている。このように、人間存在の主体性といった近代的な概念は、総-かり立て体制の下ではことごとく剥奪されていくことが見て取られる。

確かに我々の多くは新しい技術による新しい製品を入手することに懸命になり、その可否によって一喜一憂するといったことが見られる。そうした姿は我々が己の主体性を放棄し、提供される技術に身を委ねる様として受け取ることができよう。我々は技術を用いているようでいて、技術に翻弄されていると言っても過言ではないが、そうした技術の本質が総-かり立て体制という露現、すなわち不覆蔵性のあり方であり、現代を支配する真理の現れ方であると確認される。その意味で技術は、人間が目的を達成するために従属させて用いる道具や手段であるという解釈はどこまでも無効なのである。

さて、ハイデガーはこのような技術の本質を確認した上で、これと自然科学の関係について言及する。通常理解に従えば、技術は自然科学の基礎理論の現実への応用、実践であると考えられるが、ハイデガーはこの関係を逆転させ、技術的な自然の表象が基づく算定可能性をもって自然科学の自然の把握が算定可能な諸力の関係として追及（nachstellen）されると言われる（Bd. 7, S. 22）。ハイデガーがこのように言うのは、ことさらに奇を衒ったことを言おうとしたわけではなく、技術の本質を自然科学者という人間の営為に帰することを否定するためであったのではないかと考えられる。それでは、その先でハイデガーが何を思惟していたのかがさらに問題となるが、この点については先の存在者の真理と存在の真理との差異から、諸々の存在者の真理を真理であらしめる存在そのものの真理を思惟するハイデガーの思惟にしたがって、存在そのものが考えられているということを示唆するに留めておきたい。

§ 2. ニヒリズムの内にある人間存在

前節において確認された現代技術の本質に関わるハイデガーの議論では、その本質は、総-かり立て体制と名づけられたあり方、すなわち現実的なものをことごとく徴用物資として露現するというあり方の内に見出されていた。その中で人間存在のあり方がさらに問われねばならない。このことについてハイデガーが言及するのは、総-かり立て体制という露現のあり方は人間のあらゆる行為と無関係に存するののかと言えば、決してそうではないということである。この事態は、当然ながら我々人間存在との連関において生起することに他ならない。しかし、それはただ「人間の内において (in) のみ生起するのでもないし、決定的に人間によって (durch) 生起するのでもない」(Bd. 7, S. 24) と言われる。つまり、この総-かり立て体制は人間の営為の中で、人間自身によって主導されて生起するのではない、ということである。これまでの議論を踏まえて言えば、それもある意味では当然とも言える。人間存在は総-かり立て体制の中では自らもまた徴用物資の構成要素、部分品としての「人的資源」と見られていた。そこでは客観的対象に「対して立つ」主体、主観としての地位は失われていたのだ。そうであるとすれば、人間存在が現代技術の動向を主導するということも考えにくいことであろう。

しかしそれでは何がこの総-かり立て体制を導くのであろうか。このように人間も含めて徴用物資として露現するような調達すること、立てること (stellen) の集約態のうちに人間を立たせるものを、ハイデガーはドイツ語の慣用に従って次のように命運 (Geschick) と名づける。

現代技術の本質は人間をしてかの露現をなすことへと導いていくのだが、その露現は、それによって現実的なものが至る所で、多かれ少なかれ気づかれうるように、徴用物資になるような露現である。何かをなすように導くこと (auf einen Weg bringen)、何かをする気にさせること—このことはドイツ語では、送り遣わすこと (schicken; 行かせる、送り出す) を意味する。我々は露現するやうにとまず第一に人間を導くあの集約しつつの送り遣わしを命運 (Geschick) と名づける。このものからあらゆる歴史 (Geschichte) の本質が規定されるのである。……人間の行為は命運的な (geschichtlich) ものとして初めて歴史的なものになる。(Bd. 7, S. 25)

この命運によってはじめて歴史の本質が規定されると言われることから、この命運が人間の営為をも根底において導くものと考えられていることが理解される。この命

運のうちに総-かり立て体制の支配は属し、その中で人間はその都度の用立てという仕方での露現、すなわち不覆蔵性＝真理のあり方に従うことになる。これが現代技術の本質において生起していることであるとすれば、その中で人間自身は自ら信じ、それに従って自らの生を主宰するような確固たる価値観を奉ずることなく、ただ存在の命運に付き従い、翻弄されるままに日々の生を送るというニヒリズム的状况に置かれていると言うことができよう⁹⁾。人間存在は現代技術の中で無自覚的にニヒリズムの内に陥っているのである。そして、このようなニヒリズム的状况は次節において見られるように、危険 (Gefahr) と受け止められねばならない。

§ 3. テクノロジーの支配の転回

3. 1 テクノロジーのもたらす危険

現代技術の本質としての総-かり立て体制の下では我々人間存在もまた徴用物資の一つとして用立てられるものとなり、その本来の実存を喪失したニヒリズム状態に置かれていることが確認された。ハイデガーはこうした現代技術のあり方の内に危険を見出す。現代技術の本質である総-かり立て体制は一つの命運として、あらゆる現実的なものを徴用物資として露現するという唯一の可能性をもたらすと同時に、それよりも一層早く、一層密接に、一層原初的に不覆蔵性と不覆蔵なるものへと関わる可能性を駆逐するという仕方では生起する。このようなあり方において、露現の命運は「必然的に危険」(Bd. 7, S. 27) である、と言われる。

このようなハイデガーの言説を素朴に受けとめるならば、現代技術によってもたらされる様々な機器や装置、例えば、大量殺戮兵器や核兵器、あるいは最近では AI といった先端テクノロジーの所産が人間の存在を脅かすといったことが容易に想像されるかもしれない。しかしハイデガーはそうした「機械や装置」が初めて人間を脅かすがゆえに、現代技術が危険である、と言うのではない。むしろ「本来の脅威は人間の本質に対して既に襲いかかっている」(Bd. 7, S. 29) と言われ、その根本的な脅威は、人間が「一層根源的な露現」すなわち不覆蔵性へと参入することと、そのようにして「一層原初的な語りかけ」を経験することとが拒まれてしまうということの内に見られている。そのような意味において、総-かり立て体制が支配するところには「最高の意味での危険」(ibid.) がある、ということになる。つまり、総-かり立て体

9) 前掲拙論「テクノロジー時代のニヒリズムーニーチェとハイデガーの思惟を手がかりにしてー」を参照。この存在の歴史の下での、ニヒリズムの内にある人間存在の捉え方はプレーメン講演においても同様である。

制の下で人間は根源的なあり方を見誤り、誤解するという可能性を際立って経験するのである。そしてその中でもとりわけ覆蔵されるのは、「ポイエーシスという意味での現前するものを現出へと現れ－出る（her-vor-kommen）ようにする、あの露現」（Bd. 7, S. 27f）、すなわち芸術である、とされる。

つまり、総－かり立て体制は、現代技術の本質として命運的な露現の一つのあり方、しかも挑発的な露現のあり方であると言われてきたが、一方でまた命運的な露現のあり方は生み出しつつ（hervorbringend）露現すること、すなわちポイエーシスでもある（Bd. 7, S. 31）と言われており、現代技術とポイエーシス、すなわち芸術とは同じ根源を有する露現の二つのあり方であると考えられていることが理解される。しかし、その一方で、こうした両者は並立的に存しうるものではなく、「説明不能な仕方」で命運的に生み出す露現と挑発する露現とに分けられ、人間へと割り当てられる、つまり、存在から人間へと送り遣わされる、と言われる。しかも総－かり立て体制の支配するところでは、生み出す露現としてのポイエーシスは命運的に立て塞がれるとされる。

露現は命運なのであり、それはその都度、突如としてあらゆる思惟にとって説明不能な仕方、生み出す露現と挑発する露現へと分けられ、人間へと割り当てられるのである。挑発する露現の命運的な由来は生み出しつつ露現することである。しかし、同時に総－かり立て体制は命運的にポイエーシスを立て塞ぐ。（Bd. 7, S. 30f）

ここにハイデガーの見る現代の命運があると言えよう。そうであるとすれば、ここには極めて悲観的な見方が提示されていると言わざるをえない。ハイデガーの見立てによれば、総－かり立て体制の下では最高の危険が存するということであった。我々人間存在は、こうした危険の内において、それとは異なる仕方での露現のあり方を望みうべくもなく、存在からの送り遣わしとしての命運に服するのみである、と言われてるように見られる。しかしハイデガーは、ヘルダーリンの讃歌「パトモス」の詩句「しかし危険の存するところ／救うものもまた生い立つ」という言葉を引きつつ、このような危険からの救いの可能性を示唆している。我々はここに示されたハイデガーの思惟のあり方を、その指示に従って慎重に熟慮する必要がある。

3. 2 救うものとしての芸術

前節までの議論によって、ハイデガーが『技術への問い』の中で現代技術の本質としての総－かり立て体制のもたらすものを「危険」と見定めていたことが確認され

た。しかし、ハイデガーは同時にまた「危険の存するところ / 救うものもまた生い立つ」というヘルダーリンの詩句を引用することによって、現代技術のもたらす危険を脱するための示唆をも与えていた。そこで求められていたのは、現代技術と同様、ポイエシスとして〈こちらへと - 前へと - もたらすこと〉という働きを有するもうひとつの営みである芸術と考えられている。そこで我々はハイデガーが総 - かり立て体制によってもたらされる危険を救うものとして思惟していた芸術のあり方をやや時期を遡って、『芸術作品の起源』から探っていくことを試みたい。

ここでハイデガーはまずこの講演論文のタイトルについての説明から説き起こす。「ここでの根源とはある事柄が何であり、いかにあるかということが、それに由来し、それによっているところのものである。あるものがあるがままに何であるかということ我々はその本質 (Wesen) と名づける」(Bd. 5, S. 1)。したがって「あるものの根源とはその本質の由来のことである」(ibid.)と言われる。ここで我々は先の現代技術への問いとして立てられた論稿が「技術の本質への問い (Die Frage nach dem Wesen der Technik)」を主題としていたことに思い至る。つまり、この『芸術作品の根源』と『技術への問い』とは同様の問いの構造の下に問われたものであり、しかも、すでに確認されたようにハイデガーにとって芸術は技術とその根を同じくするものとして理解されていたことを考慮するなら、この二編は主題と問いの構造において、同じ思惟の圏域に属するものであることが理解される。したがって『技術への問い』が技術の本質への問いであったように、『芸術作品の根源』は「芸術作品の本質の由来に向かって問う」(ibid.)のである、とされる。

このように問うハイデガーは、芸術家と作品との相互規定性を述べたあと、両者に対する「第三のもの」として、まさに「芸術」をあげ、この芸術が芸術家と作品の根源であるのか否か、あるいは芸術とはこの両者の「集合表象」であるとすれば、芸術は諸々の作品と芸術家たちの現実性に基づいてしかありえないということになるが、果たしてそうであるのか、あるいは事態は逆であって、作品と芸術家たちがあるのはただ芸術が存在する限りにおいてであるのか、しかもそれらの根源として存在する限りにおいてであるのか、といった問いが重ねられていく。そして、こうした問いにどのような決定が下されようとも、「芸術作品の根源への問いは芸術の本質への問いとなる」(Bd. 5, S. 2)ということが確認される。

しかしここで、我々が芸術作品を考察するにあたってそもそも何が芸術作品であるか、という問いが生起する。芸術作品は芸術家によって製作されるものであるが、一方で芸術家は芸術作品を製作してはじめて芸術家であるとされる。ここには明白な循環が生じている。そこで両者を規定する第三項として(位階としては第一項であるべきものとして)芸術 (Kunst) があげられるが事態は変わることはない。そこでハイ

デガーは、この循環、円環行 (Kreisgang) の内に入って行き、この歩みを遂行することを思惟の使命とする。

さて、「物と作品」「作品と真理」「真理と芸術」という章立てで論じられるこの論文は、まずは物と作品という主題のもとに作品の物的性格について言及される。確かに芸術作品もまた、ひとつの物体的存在者である以上そこに「物的性格 (das Dinghafte)」が認められるのも事実であり、それはハイデガーも言うように「自明」なことでさえある。しかし、我々はこの自明なことを踏まえた上でさらに芸術作品の本質を問わねばならない。つまり、建築作品にとっての石質のもの、木彫り作品にとっての木質のもの、絵画にとっての色彩的なもの、楽曲にとっての音響的なもの、言語作品にとっての音声的なものといった物的性格を超えて、ハイデガーが言うところの「何か別のもの」、純然たる物そのものであるという以外の、それ以上の何か別のものが何であるかを思惟する必要があるのである。ハイデガーはこの何か別のものを公けにし、顕わにする芸術作品のあり方を 'Allegorie' すなわち寓喩と呼び、またこのように別のものを「一緒にもたらす」というあり方から、芸術作品とは象徴 (Symbol) である、と規定する¹⁰⁾。こうした芸術作品の芸術作品たる所以を問うために、ハイデガーはまず「物と作品」という節において、伝統的な思惟の歴史において捉えられてきた物のあり方の規定を確認することから始める。

「物と作品」の考察にあたってハイデガーは路傍の石、耕地の土塊やまた壺や道端の泉を例として列挙し、さらに壺の中の牛乳や泉の水、空に浮かぶ雲と野に咲く薊、秋風に舞う木の葉と森の上を飛ぶ大鷹までも物のうちに数えあげる。さらにその上に、現象しないものとしての「物自体」に言及し、その中では世界の全体も神も「物」と呼ばれると言い、哲学の言葉における物の範囲を見渡そうとする。そして、「物」という語は、端的に何でも無いものではないあらゆるものを名指している」(Bd. 5, S. 5) と言う一方で、神や人間、動物といった生命あるものを物と呼ぶことに躊躇を覚えるという考え方を示し、それらと区別された生命のない自然のものと生命のない使用されるものが所謂物なのである、と言う。そして、さらに言えば使用物すら除外した純然たる物を本来的な物とみなして、これに基づいて物の物性は規定されねばならない

10) ハイデガーはこれらの語のギリシア語の語源に遡り次のように述べる。「芸術作品は物的性格を超えている上に、まだ何か別のものである。物的性格の実際にあるこの別のものこそ、芸術的なものの本質をなす。芸術作品はなるほど作製された物であるが、純然たる物そのものがあるという以外に、まだ何か別のことを言っている (ἄλλο ἀγορεύει)。作品は別のものを公けに紹介し、別のものを顕わにしている。作品とは寓喩 (Allegorie) である。芸術作品においては、作製された物と共に、まだ何か別のものが一緒にもたらされる。一緒にもたらすはギリシア語では、συμβάλλειν (共に投げること・一緒にもたらすこと) と呼ばれる。作品とは象徴 (Symbol) である。(Bd. 5, S. 4)

とされる。その上ではじめて「尚何か別のものがその中に込められている作品の……現実性」(Bd. 5, S. 6) を特徴づけることができるようになる、と言われる。

ここでハイデガーは芸術作品を単なる物とは何か別のことを顕わにするものとして示すために、物というあり方が西洋の思惟の成り行きの中でどのように解釈されてきたかを問い直す。そのような物の物性は西洋の思惟の伝統においては「純然たる物」あるいはそれらの諸徴表としての「諸特質」そして、それら諸特質を根底において担うものとしての「基体」「実体」というあり方として理解されてきたとされる。そして、重要なこととして、こうした「存在者の存在 (das Sein des Seienden)」を「現前性 (Anwesenheit)」として把握するギリシア人の根本経験が語り出されている、とされる。しかし、それが 'subjectum', 'substantia', 'accidens' と古代ローマ的ラテン語に翻訳されることでギリシアの根本経験が失われ、西洋の思惟の地盤喪失が始まると言われる。

このようなギリシア的な物の把握は物を質料的なものと理解し、すでにそれが形相とともに定位されているとする、伝統的な質料と形相の総合 (Synthesis) としての物の概念を導き出すこととなる。その観点から言えば芸術作品もまたこうした物の物的性格に呼応するものを有していることは明らかである。つまり「作品は質料から成る」以上、その内に上述のような質料と形相の総合ということもここで十分に納得されうるものであると考えられる。しかしハイデガーはこうした常識的な説明を超えて、芸術作品が語る「何か別のこと」を求めて考察を進める。

そのために手引きとされるのは純然たる物と作品との間の独特な中間位置を占める道具である。しかし、このような道具もまた伝統的な思惟方法によって物、道具、作品の一切のあり方の相異を超えて、一般的に思惟する思惟方法のもとに理解されるということに注意する必要があるとハイデガーは言う。そこで、ハイデガーによれば、我々には、「道具を哲学上の理論なしに単純に記述する」(Bd. 5, S. 18) ことが求められる。その際ハイデガーは、道具として一足の農夫靴を選び、それを記述するために、ヴァン・ゴッホの描く農夫靴の画を取り上げる。つまり、物、道具、作品といった存在者の間の相違を思惟するために、まず特別な中間位置を占める道具の道具存在を明らかにするための手引きをもう一つの存在者である作品の内に求めようというのである。ここにもすでにハイデガーに独自の思惟の循環を見て取ることができる。

さてハイデガーによれば、道具の道具存在は言うまでもなくその有用性に存すると考えられるが、しかし我々はこの有用性でもって道具の道具性格を既につかんでいると言えるか、と問いかけられる。というのは、靴という道具がまさに靴であるのは、畑地で働く農婦がそれを履いているときであると考えられるが、しかし、それを靴として用いる農婦が作事中にまさにその靴のことを考えたり、さらに眺めたり、また気

づいたりすることが少なければ少ないほど、それだけ一層真正に靴は、それであるところのものとなる (Bd. 5, S. 18)。つまり、靴はそれが履くという仕方では用いられるときにそのもの自身の本来のあり方において把握されるということである。ただし、その際靴がいわば客観的に見られたり、思惟されるときには、その本来の存在を喪失してしまうと考えられる。

ということは、ここで道具として取り上げられている農夫靴に関して言えばそれを履いて用いている当の農婦自身は畑地での仕事に勤しんでおり、もちろんそのために有用であるからこそ農婦は靴を履いたのであるが、その仕事中にはその関心が仕事の対象へと向かっているため当の靴そのもののあり方を見出さない。一方それを客観的な対象として見ようとする者は、その初めから靴の道具性格を把握することは不可能ということになる。それではそのようにして誰も知りえない靴の真のあり方はどのようにして見出されるのであろうか。

そこでハイデガーが提示するのが、ゴッホの描く農夫靴の画である。この画からハイデガーはこの農夫靴を履く農婦の労働のあり様とそれにまつわる多様な情態性ととともに、それらすべてが大地 (Erde) に帰属し、農婦の世界の中で守られているということが見て取られる、と言う (Bd. 5, S. 19)。そしてこのような「大地への帰属」と「世界への確信」を支える事柄をハイデガーは信頼性 (Verlässlichkeit) と名づけ、この信頼性に基づいてこそ道具の通常理解である有用性も把握可能となることから、道具の道具存在、その道具性格は信頼性に本質を有するということが理解される。

さて、それではハイデガーとともに我々はこの道具の本質としての信頼性をいかにして眼差しの内に捉えることができたかと言えば、まさにゴッホの画という作品を通してである。我々は漠然と有用性という形で理解していた道具の道具存在を、作品によって初めて、その内においてのみ知るようになったのである。つまり作品の内に靴という道具存在の真理 (Wahrheit) が置き据えられたのである。作品の内には道具という存在者の真理が開き示されたのであり、この開き示し (Eröffnung) はギリシア人が真理にあたることとして思惟していたアレーティア (ἀλήθεια) に他ならない、とハイデガーは言う。したがって、芸術作品の根源を問う過程において、我々は芸術作品とはその内に存在者の真理が開き示される場所のものであるという規定に到達したことになる。これは通常の作品理解とは異なるものである、と言えるかもしれないが、そこにこそ通常の思惟には見通されない次元が開かれている、と考えられる。

結語 テクノロジーと芸術における真理

さて、本稿の主題であるハイデガーのテクノロジー批判と、ここまでの暫定的な芸

術作品の本質への問いから理解されることは、芸術作品とはその内に真理が置き据えられる開き示しの生起するところであるという規定が、本稿で見られたようにハイデガーによって後に批判されることになる、テクノロジーの本質をなす総-かり立て体制という露現のあり方に対して、より根本的で、より真正な真理として思惟されているということである。

ここまでの考察を通して、我々は技術と芸術という二つの技を通して開かれる真理のあり方についてのハイデガーの思惟を、技術、とりわけ現代のテクノロジーと芸術作品の、真理との関わりにおいて跡づけてきた。そこから明らかになったのは、ハイデガーによってテクノロジーの内に見出された危険を超克する可能性、そこからの救いの可能性が、芸術作品によって開かれる真理の内に見られていたということである。ここに我々自身が現代のテクノロジーと向き合う際の示唆が示されていると言うことはできよう。

ただ、『芸術作品の根源』について言えば、さらに「作品と真理」、「真理と芸術」の連関について明らかにする必要がある、更なる考察が求められる。しかし、本稿は技術と芸術の真理のあり方がハイデガーの思惟の中で密接に連関し、それが現代の危険の現象とその超克の道と連関していることを示すことで結びとし、更なる課題については稿を改めたい。